第２０回英連邦戦没捕虜追悼礼拝開催される

８月２日（土)、横浜の英連邦戦死者墓地で第２０回英連邦戦没捕虜追悼礼拝が開催されました。

青い日よけの下に集まった参列者

この追悼礼拝は、１９９５年戦後５０周年を迎える年に、元陸軍通訳の故永瀬隆氏、国際基督教大学副学長の故斎藤和明氏、青山学院大学名誉教授の雨宮剛氏の提唱で始まりました。日本人による初めての追悼礼拝です。それ以後毎年８月の第１土曜日１１時より行われ、今年で２０回目を迎えました。

オランダ海軍武官の挨拶

およそ２００名の参列者は、今は亡き永瀬氏と齊藤氏の熱意を思いつつ、また多くの埋葬者が泰緬鉄道など南方での過酷な労働を経て日本に連行され、更なる苦難の果てに死亡したということもあり、８月の炎天下で彼等に思いを馳せるという形の式典となりました。ＰＯＷ研究会からも会員５名が参列しました。

オーストラリア大使館、オランダ大使館、ニュージーランド大使館からの武官も参列、うち二人が挨拶をされました。まずニュージーランドのアンソニー・ヘイエス海軍大佐は、「今私達は平和を享受する恩恵を受けていますが、世界中の戦争行為を思うとこの平和は非常にもろいものです。ここに眠る人々は自由を剥奪され、恐怖と困難の中にありました。国家間の緊張、紛争、戦争行為の解決は難しく、和解に至るには世界の指導者たちの決意と決断が必要です。どんなときにも人間の尊厳を保ち、私達の基本的な価値を世

界の政府と国連が支え続けることを願います。最後に捕虜の物語を語り続けているＰＯＷ研究会に感謝の意を表したいと思います。連合軍捕虜達の命と犠牲は決して無駄ではありませんでした。平和を全ての人々に手渡せるよう、世界は学び続けなければなりません。」と語りました。

またオランダの武官ヴィレム・フェルミューレ海軍大佐はご自分の家族の歴史について触れられました。「１９４２年２月、祖父は海上勤務の為出動、祖母は翌年１１月、２人の息子とともに列車でジャワ島中部の収容所に移動させられ、医療、食料不足に耐えました。１９４４年２月、息子の１人は１１歳になった為、男性収容所に移されました。戦後、夫が乗船した駆逐艦が雷撃され、戦争捕虜としてビルマ(泰緬鉄道)に移送されたことを知り、祖母はタイへ迎えに行き、赤十字の支援で、バンコクで無事再会することが出来ました。本日の礼拝は戦没者を追悼するだけでなく、平和の重要さと、現代の国際関係においての人間の尊厳を尊重することの大切さを再認識させてくれます。」

駒井氏（中央）と雨宮氏（右側）

最後に雨宮氏が主催者として挨拶されました。「この追悼礼拝を始めた時はこれほど長く続けられるとは思いもしなかった。きっと永瀬さんと齊藤先生の魂も今ここにあり、２０周年という記念の年の皆さんの参加を喜んでおられることでしょう。私もこの秋で８０歳となります。これを機会に代表を降り、来年からは体が続く限り、一参加者として参加して行きたいと思います。」

世代交代を、また若い世代への継承を象徴するように、献花は武官と高校生や盛岡から駆け付けた駒井修さん等の手で行われました。

駒井さんは、お父様が捕虜収容所副所長として捕虜虐待の罪を問われ、シンガポールでの絞首刑第一号となった方です。幼い頃タイにいる父からもらったやさしい手紙とのギャップや、戦犯の子として育った辛い経験から、今は和解と平和のための活動をされています。

主催者側の協力を得て、今年からＰＯＷ研究会がこれまで調べて来た埋葬者について数名ずつの紹介を、プログラムの中に資料として挟んでもらうこととなりました。

翌日、朝日新聞横浜版がこの追悼礼拝を写真入りで報じました。

http://digital.asahi.com/articles/ASG824TGCG82ULOB00X.html?iref=comkiji_txt_end_s_kjid_ASG824TGCG82ULOB00X

（田村佳子）